

15:20 授業開始

授業
ハイライト

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

世界史

●人間探究科3年生の学校設定科目「世界史実践」の「イギリスの覇権と欧米の国民国家建設」を学ぶ。全9時間の8時間目後半〜9時間目前半。ペアワークを主体に、フランス・アメリカにおける国民国家の形成について学んだ。(P.31に単元の指導計画を掲載)

授業前の休み時間に、生徒が学習の舞台となる北アメリカの地図を黒板に描き、生徒同士で正確かどうかを指摘し合った。地図の板書は輪番制だ。次に、ペアとなるよう机をつけ、その真ん中に資料等を置いた。授業が始まると、吉谷先生は「教科書と資料集は何ページから？」と質問し、「素早く答えられると、参照の力がつくよ」と励ました。

ペアワークや音読などの言語活動、
教科を横断した問いかけで、
生徒の思考を広げ、深める

吉谷先生のアクティブ・ラーニング

世界史を心から楽しみ、
歴史を俯瞰して考える視野を育む

吉谷先生が自身の授業改善に取り組み始めたのは、教職4年目のことだ。以前の授業では、生徒が教師の解説や板書をノートに写すことが中心で、集中が続かず、私語も見られたという。「生徒の心に残る授業を目指して、先輩の先生方の指導をまねたり、アドバイスを受けたたり



京都府・京都市立堀川高校

吉谷智美 よしたに・とみ

教職歴16年。同校に赴任して9年目。
地理歴史・公民科担当。
現在の形式での授業の実践は、約12年目となる。

京都府・京都市立堀川高校

◎学校の最高目標は「自立する18歳の育成」。1999年度に専門学科「探究科」が設置され、普通科・探究科ともに基礎的な探究能力の育成と、進路実現に向けた確かな学力を培う独自の教育活動を展開する。

◎設立 1908(明治41)年

◎形態 全日制/普通科・人間探究科・自然探究科/共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2018年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大などに204人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ345人が合格。

◎URL

<http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/horikawa/>

続いて、フランス第3共和政についての学習。吉谷先生は、資料を見せたり、歴史のエピソードを紹介したりしながら、テンポよく解説。さらに、既習内容を思い出させたり、資料や地図を確認させたりする質問をこまめに投げかけ、ペアで確認させた。生徒の視線は、先生やペアの相手、教科書など、常に動いている状態だった。

前時の復習後、フランス第2帝政の学習に入った。授業は毎回、生徒が教科書の段落や一文を音読し、吉谷先生が該当箇所を解説する流れで進む。音読は、先生が代表者を指名したり、ペアでじゃんけんに勝った生徒が読んだり、形態は様々だ。先生は、ナポレオン三世が登場する現代文の評論について触れるなど、他教科と結びつけて解説した。

して、授業改善を進めてきました」

転機となったのは現任教への赴任だ。同校では「自立する18歳の育成」を学校の最高目標に掲げ、3年間の全教育活動で生徒を成長させるカリキュラム・マネジメントに注力する。吉谷先生はその中で世界史が果たす役割を考えた。

「世界史の授業を通して、先人の決断の積み重ねが歴史を形作ってきたことを実感させることで、現代を生きる私たちの決断の大切さに気づき、自分の言動に責任を持つようになると考えました。そこで、授業では『だから、今の世界はこうなっているのか』と、納得できる体験を多く持たせるようにしています」

また、異文化や多様性を理解して受け入れる姿勢の涵養や考えを的確に伝える言語活用能力の育成も、世界史の役割と捉え、力を入れている。

思考の活性化・深化への配慮

教科書の読解をベースに 思考を促す発問をこまめに入れる

授業は、教科書の読解をベースに展開する。

「以前は、私が整理した内容の解説だけをしていましたが、先輩の先生から『それでは生徒が復習しづらいと思う』と言われました。そこで、生徒が自分1人でも考えながら学習できるように、教科書に沿って授業を進めることにしました」

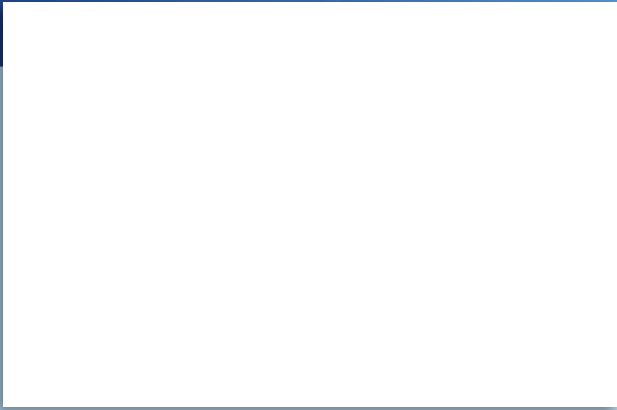
授業では、生徒が教科書を音読する場面が何度もある。授業冒頭で授業の全体像を把握する

ために学習範囲のすべてを読んだり、途中で重要な箇所を読んでポイントを押さえさせてから解説をしたりと、そのパターンは様々だ。

「声に出すことで頭が働きやすくなり、最初に概要を把握させることで、その後の解説も生徒の深い理解につながります。また、難解な漢字や長いカタカナの語句は、スラスラ読めるようになる」と、知識の定着もしやすいようです」

そして、解説には生徒の思考を活性化させる様々な発問を織り交ぜ、授業中、ずっと考えさせるようにしている。今回の授業では、フランス第2帝政の学習に入る際、「1848年に起こった革命は？」「その時にできた政治の体制は？」など、復習の質問を投げかけ、まず既習内容を思い起こさせ、次の学習内容につないでいった。さらに、フランスの自由主義では「どんな人が自由主義者になったと思う？」と発問し、事象の背景を考えさせてから解説した。

同校では、普段から教科を問わず、教師間で授業内容や生徒の様子について情報交換し、それを授業に還元するなど、教科間の関連を意識した指導を展開している。今回の授業で登場したナポレオン三世は、同時期に現代文の授業で扱う丸山眞男の評論にも出てくると現代文の教師から聞き、吉谷先生は現代文の授業でも教科書をしっかりと読むように働きかけた。さらに、アメリカの南北の産業構造を地理の気候条件に結びつけて説明した。他の教科の授業でも、同様に教科を横断した発問が頻繁にあるため、生徒



アメリカで国民国家が形成された経緯について学習した。吉谷先生が考える視点を提示し、ペアで意見を交換して考えを深め合った。例えば、「ペアで教科書を読み、米英戦争が経済的独立につながったと判断できる箇所を探して」と、学び合いを促した。生徒たちは教科書の内容を整理し、説明し合った。そうした活動が授業時間の終わりまで続いた。



アメリカの地域における産業構造に関する学習に移行。吉谷先生は、「アメリカの統合を象徴するものは何だと思う？」と質問し、アメリカ民謡「線路は続くよどこまでも」をカセットから流して、学習のイメージを持たせた。アメリカの学習に関するプリントが配布され、生徒は先生の解説を聞きながら、プリントに重要事項とメモを適宜書きとっていった。

は自分たちで学習内容の関連性を見つけ始めると言う。言語活用能力の育成に向け、個別の論述指導にも力を注ぐ。定期考査前、生徒は数十の問題の中から10題を選んで論述し、特に力を入れた3題にマークをつけて提出する。吉谷先生はそれらを添削して返却する。

「史実の正確さに加え、設問の意図を捉えた記述かどうかを重視します。例えば、『ルターの宗教改革の展開を説明せよ』という設問では、宗教改革ではなく、ルターのしたことを答えたために論旨がずれた記述になる場合があります」

1年次の「世界史A」の授業から、そのように論述問題に取り組ませ、「世界史は暗記科目」という生徒の思い込みをぬぐい去る。

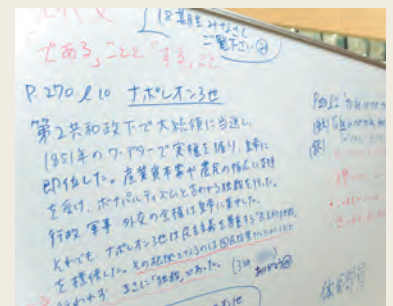
「知識は説明できなければ役立たないことを、生徒は次第に理解します。そうすると、『中学校で覚えた内容は、こういうことだったのか』と気づき、世界史の楽しさを感じていきます」

場づくりへの配慮

ペアで補い合いながら
新たな気づきや考えの広がりを得る

吉谷先生は、ペアワークを主体に授業を進める。ペアの生徒同士で机をつけ、その真ん中に教科書や資料を置いて一緒に見ながら話す。

「1人で音読するよりも聞く相手がいる方が、明瞭に読もうという気持ちになります。考える場面でも、相手に伝えたいという意識があると



廊下にあるホワイトボードを活用し、生徒が世界史の発展的な内容について自由に議論。この日は、ナポレオン三世に関して、現代文の授業で学んだ丸山眞男の評論との関連を解説していた。

一生懸命に考えます。相手の意見を参考に考えを広げ、新しい見方に気づくよさもあります」

生徒は、先生からの指示がなくても、ペアの相手と相談しながら学習を進めていた。先生の解説を聞き逃したり、理解できなかったりしても、ペアで補い合えるため、授業についていけないという生徒が少なくなる。教師が生徒の学習活動により広く目配りできるだけでなく、授業のスピードを上げられる点も利点だと言う。

成果と課題

多面的な思考力を伸ばし、
事実の背景に目が向くように

そのような授業にしてから、生徒の知識の定着が高まっている。さらに、吉谷先生は多様な場面で生徒の思考の深まりを感じるようになった。

「3年生になると、多くの生徒は教科書をうのみにせず、『ここはさらっと書かれているけれど、具体的には何があったのだろう、どうい

単元の指導計画

【教科・科目】人間探究・世界史実践（学校設定科目） 【分野・単元】イギリスの覇権と欧米の国民国家建設

【テーマ・作品】「国民」とは誰のことが、「自由」とは誰の自由か 【設定時数】全9時間中の8時間目の後半～9時間目の前半

【単元目標】18～19世紀の欧米の経済的・政治的変革から産業社会と国民国家の形成を理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	イギリスの覇権と自由主義	イギリスが産業革命で形成した競争力を基盤に、経済・政治面で自由主義改革を行ったこと、アイルランド人はそのイギリスの労働力の一部となり、発言権を得ていたことを理解している。【知識、思考力】	①ナポレオン戦争の影響、及び「国民」「自由」を考える単元であることも確認する。②兄弟げんかを例に、重商主義と自由主義の違いについて考え、理解する。③イギリスによるアイルランド併合を、「国民国家」形成の観点から考える。	【主体的な学び】①全体音読では、誤読や読みづらい語句がないかに留意。②年度当初に、音読や地図描画には生徒の弱点を把握できるメリットがあることを共有。【対話的な学び】①音読やダイアログをペアで行う。②生徒が輪番で黒板に地図を描く。③ペア及び全体交流の時、ほかの生徒の発言を楽しめているか。④音読時、相手に読んで聞かせるように留意。⑤人物の画像や地図などをペアで確認する時、協力する姿勢があるように留意。【深い学び】①「自分より強い相手とけんかする時、ルールはほしい？ その逆なら？」②自由主義を強く志向する者は、その分野における優位を確信している傾向があるという点に留意させ、身近な例や現代の貿易交渉などにその事例があることに気づかせる。重商主義との比較にも留意。	・小テスト ・定期考査 ・論述課題 ・授業の感想
2	ウィーン体制の成立、ラテンアメリカの独立、ギリシア独立戦争	19世紀前半、ヨーロッパをフランス革命前の状況に戻そうとするウィーン体制が成立したが、その体制は自由主義・国民主義運動と大國間利害対立によって揺らい	①ナポレオン戦争の影響を確認する。②ウィーン議定書の内容を資料集・地図で確認する。③ラテンアメリカの社会構造と独立運動の関係を整理する。④オスマン	【主体的な学び】①年号はしつこく発問する（年号比較は歴史的思考の必要条件）②必要に応じてプリントの構成について説明し、1人で復習する時に迷わないようにガイドしておく。【深い学び】「自由主義と国民主義が、なぜウィーン体制にとって都合が悪いのか」を捉えさせる。	
8	イタリアとドイツの統一、フランス第2帝政から第3共和政	ウィーン体制崩壊で独伊で上からの国家統一の動きが加速し、プロイセン中心のドイツ統一も普仏戦争の勝利で完成したこと、またフランス第2帝政による対外戦争の失敗と第3共和政成立の流れについて理解している。【知識、技能、思考力、判断力】	①1848年までの独伊における自由主義・国民主義運動を振り返る。②地名が出てくるごとに地図上で確認する。③ビスマルク外交とその結果を地図上で確認する。④第3共和政下の政治的不安定さを「思想の定規」と教科書読解で理解する。	【主体的な学び】①「今日もいろいろやこしい。でも人間が面白い。頑張ろう」と確認。②「美しく青きドナウ」を聞かせ、文化史を歴史の事件と関連づけられるよう留意する。【深い学び】①「なぜオーストリア、ローマ教皇がイタリア統一に反対するのか」②「なぜ大ドイツ主義と小ドイツ主義が対立するのか」③「ビスマルク外交にとって最も大切な相手はどこか」	・小テスト ・定期考査 ・論述課題 ・授業の感想
9	アメリカの拡大と国家統合	領土拡張が続くアメリカで移民による西部開拓が進む一方、先住民への迫害が起きたこと、南北戦争が黒人奴隷制の是非や貿易政策を争点に発生し、その後、工業国として成長していく流れを理解する。【知識、技能、思考力、判断力】	①自然条件からアメリカ北部と南部で産業構造の違いがあったことを振り返る。②西部開拓の進展を地図上で確認する。③南北戦争の死者数などを資料集を用いて確認する。④「国民」とは誰かを考える。	【主体的な学び】①「ここからずっとやこしい。でも、そろそろ慣れてきたよね」。②単元の最後に出てくるアメリカは、歴史上特異な成立経緯を持つ国である点を押さえ、「国民国家形成」のまとめとして、これまでの学習を振り返り、整理させる。【対話的な学び】「アメリカの国民が国民意識を感じると思われるもの」について、その根拠をペアで話し合い、全体でも共有。【深い学び】①アメリカ民謡「線路は続くよどこまでも」を流し、「この歌を明るく歌える人は誰だろう」と問いかける。②参考資料として「なめらかな社会とその敵」の定期考査で出題した問題文を再度配布する。	・小テスト ・定期考査 ・論述課題 ・授業の感想

*吉谷先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全9時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の声



ことなのだろう」と、さらに深く掘り下げて捉える姿勢が見られます。自分なりに考えて理解しようとするからこそできることです」

廊下にあるホワイトボードには、吉谷先生が授業に関連した発展的な問いを書き、生徒が自由に議論する場としている。想定外の考えが書かれることもよくあり、生徒が世界史を楽しみ、自ら深く考えようとする姿を感じ取っている。

「世界史の授業で身につけた知識や思考力・判断力が、世界に羽ばたき、世界を動かす勇氣と力の1つとなるよう、改善を進めていきます」

喜多章成さん

吉谷先生の解説は、

事象の背景にある意味の説明に重点が置かれているため、覚えながら考えることを意識するようになりました。物事を批判的に捉えたり、過去と照らし合わせて未来を展望したりする考え方が身についたと思います。そうした授業を通して世界史が好きになり、大学でも専門的に学びたいと思っています。

橋本奈津美さん

吉谷先生の授業

はテンポがよく、音読、既習内容の振り返り、面白い小話など、メリハリがあつて集中できます。授業内容をすべて吸収しようと、必死に食らいついています。ペアの相手にいつでも相談できることが、大きな助けになっています。3年生になり、縦と横のつながりの中で歴史的事項を捉えられるようになりました。そのように立体的に物事を捉える学習が、吉谷先生の授業にはあります。